ゲルツェンにおける18世紀の遺産

——ピョートル1世とフランス革命——　その1

Alexander Herzen and the Heritage of the 18th century (Part 1)

加藤史朗（学部共通課程）

※次の30巻本ゲルツェン著作集からの引用については、本文中の（　　）内にローマ数字による巻数・ページ数の順で記した。А. И. Герцен, Собр. Соч. в 30 томах, под. ред. В. П. Волгина, М., 1954-56.

※日付は、ロシア国内におけるものは旧ロシア暦、国外におけるものは新暦による。

※本稿は西洋史学会（2000年5月大阪外国語大学）における発表原稿に加筆したものである。

はじめに

20世紀が社会主義の世紀として特徴づけられるとすれば、19世紀はその実験と試行錯誤の時代であったと言えよう。社会主義の実験は、1848年の二月革命と1871年のパリ・コミューンに集中的に現れている。二月革命の渦中に身を置き、コミューン前年にパリで客死したアレクサンドル・ゲルツェンは、一般に「ロシア社会主義」と「ナロードニキ主義（ナロードニチェスヴォ）」の創始者として知られているように、「社会主義」と分かちがたく結びついた人物である。レーニンはゲルツェン生誕百周年にあたる1912年に「ゲルツェンの追憶」と題する論争的な一文を書き、彼にボリシェヴィキの先駆者としての地位を与えた(1)。しかし、このことがペレストロイカ以降、今日にいたるまでのゲルツェン不人気の一因となっている。アルバート街のほぼ中央部を西に外れた横丁スヴィツェフ・ブラジェックにあるゲルツェンの旧宅（現在博物館）には、1988年以来なんども足を運んだが一度として他の訪問者と出会ったことはない。2001年の夏に訪れたときも例外ではなかった。館員の老婦人は、ロシア人はゲルツェンを読まなくなったと嘆き、日本における『過去と思索』完訳(2) のことに話が及ぶと、「日本人は知的な国民 умный народ だ」と呟いた。「ゲルツェンの教訓をもう少し考慮していたならば、20世紀における社会主義の無残な失敗は、少

しは緩和されたとは思いませんか」と問いかけると、老女はその通りだと答え、ロシア人は『向う岸から』や『過去と思索』をもっと読むべきであったと付け加えた。

先に筆者は、常に歴史意識の更新を迫るゲルツェンの鋭い「歴史感覚」に着目し、彼が「歴史の暴力 насилие истории」を最も忌避していたことを論じた[3]。「歴史の暴力」とは、固定した歴史意識に基づく観念を優先させ、歴史の事実を歪曲することである。彼は歴史の運動に法則性を見出し、絶対精神の自己実現過程として世界史を捉えたヘーゲルや、資本主義から社会主義へと至るプロセスに世界史の法則を読み取ったマルクスなどに見られる「歴史主義」を批判した。こうした彼の倫理的・哲学的信念をバーリンは、次のように要約している。

1．自然は計画に従わないし、歴史は台本に従わない。
2．原則として、唯一の鍵や公式が個人や社会の問題を解決するということはありえない。
3．一般的な解決は解決ではないし、普遍的な目標は真の目標ではない。
4．各時代はそれ自身の手触りをもち、固有の問題を抱えている。単純化や一般化は経験にかわるものではない。
5．特定の時間と場所における現実的な個人の自由こそが、絶対的な価値である。
6．自由な行動のための最小限の場所こそ、全ての人々にとって道徳的に不可欠なものであり、それは永遠の救済とか歴史とか人間性とか進歩とか、ましてや国家とか教会とかプロレタリアートなどといった、現代や過去の偉大な思想家たちによってあまりにも勝手に撒き散らされてきた抽象語や一般原理の名において抑圧されるべきではない。
7．これらの偉大な名目は、忌むべき残酷さや専制政治のさまざまな行為を正当化するために持ち出されたものであり、人間的な感情や良心の声を窒息させるようにもくろまれた魔術的な決り文句なのである[4]。

無論、「歴史主義」を批判するこうした信念は、現実との格闘の中で激しい思想的動揺を経て形成されたものであり、体系的なものではないばかりか、むしろ体系化を否定するものである。しかし、あえて言えば、彼の思想的動揺の基軸ないしは支点として、18世紀の遺産をどう継承するかという問題があったように思われる。それは青年期の、いわば自己

形成期の主要課題であったし、西欧亡命後においては、18世紀啓蒙思想の政治的帰結というべき諸事件の渦中にあって、18世紀の遺産をどう評価すべきかという問いは差し迫った現実問題でもあった。

本稿では、彼の思想形成においてピョートル改革やフランス革命といった18世紀の遺産がどのように評価され継承されたかを検討し、ゲルツェンの思想の特徴を描くことを目的とする。ゲルツェンの「ピョートル一世観」(5) ならびに「フランス革命観」(6) については、それぞれのテーマに関してそれなりの研究の蓄積がある。したがって本稿で両者を個別に検討することは避けたいと思う。さらに言えば、両者は個別のテーマとして別々に検討されるべきではなく、18世紀の遺産として分かちがたく結びついたテーマであり、一体のものとして検討されるべきである。それは一人ゲルツェンについて当てはまるだけではなく、ラジーシチェフ以来ロシアのインテリゲンツィアにおいて両者の関連性がいかに意識され、問われ続けて来たかを考えれば明らかなように、ロシア・インテリゲンツィアに共通に言えることなのだ。だが筆者の考えでは、ゲルツェンほど、両者の深い関連性を意識し、思索した知識人はまれであった。

(1) ピョートル1世とフランス革命

① カラムジンの遺産

シュラペントフは近著において、ロシアのインテリゲンツィアの間で、フランス革命に対する本格的な関心の始まりは19世紀後半であったとして、19世紀前半、すなわちアレクサンドル一世(1801-1825)とニコライ一世(1825-1855)の時代は、フランス革命よりも、ロシア史とピョートル一世に対する関心が支配的であったと指摘している(7)。彼が主として分析の対象にしているのは、1865年から1905年にかけての期間である。1865年は、アレクサンドル二世の改革に対する幻滅が政治テロやストライキを招来しはじめた時期と一致する。すなわち、それはロシアのツァリーズムが啓蒙絶対主義的な可能性を失い、1905年の革命へと至る道程であった。だがこの時期にフランス革命が関心を集めたとはいっても、もちろん相対的な意味においてである。シュラペントフ自身が認めているように、19世紀の末から20世紀初頭にかけて、フランス革命の考察は従来の印象批判的考察から社会分析的な考察へと転換するが、その一方で、リベラルの間では、フランス革命は、西欧文明と人類史から切り離された特殊現象であるとい

う見方も広まっていたからである[8]。革命と同時代の18世紀末のロシアにおいても、フランス革命への関心は、エカテリーナ二世の政府においては言うまでもなく[9]、知識人においても、例えばラジーシチェフやカラムジンやプーシキンを通してピョートル改革との関連性のなかで重要なテーマとなっている。とりわけカラムジンにおける「フランス革命とピョートル一世」観は、その後のロシア知識人に対して一種の金型を提供しているかのようである。

カラムジンは1789年、革命勃発の直前にモスクワを発ち、フランクフルト滞在中に革命の報に接する。その後、スイスをしばらく旅行した後、1790年にパリに到着し、フランス革命の渦中における体験を『ロシア人旅行者の手紙』として書き残している[10]。1790年4月の条では革命について次のように記している。

> ……今フランスで演じられている悲劇に、すべての国民が参加したとは思わないでください。おそらく百分の一も行動していないだろう。……
>
> 七月十四日からフランスでは皆が、貴族と民主主義者について繰り返し言っている。大部分の者はその意味も知らずに、その名でお互いに誉めたりけなしたりしている。……
>
> 長い間かかって確立された市民社会は、善良な市民にとって大切なものである。そしてたとえ不完全な社会でも、調和、整備、秩序の素晴らしさに驚きの声を上げるべきである。「ユートピア」はいつも優しい心の持主の夢想だろう。あるいは気がつかないほどの時代の影響によって、ゆっくりとだが、確かな危険のない理性の成功と啓蒙、教養と善良な人格によって実現されるかもしれない。自分の幸福には徳が不可欠であると人々が確信すれば、黄金時代がやって来るだろう。しかしどんな統治形態においても人間は平穏無事な暮らしを楽しむだろう。どんな強制的な変動も破滅を招き、暴徒はいずれ自分の断頭台を準備する。わが友よ、自らを神の手に委ねよう。もちろん、神には計画がある。神の手に国王の心はある――それで十分だ。
>
> 軽薄な人びとはすべてが容易だと思っている。賢い人々はあらゆる変化の危険性を知っている。……不道徳な心を持った新しい共和

主義者たちよ！　プルタルコスを開け、そうすればお前たちは古代ローマの最も偉大な高徳の共和主義者、カトーから、「無秩序はどんな権力よりも悪い！」ということを聞くだろう[11]。

興味深いのは、彼が革命渦中のパリでルヴェク（Levesque, P. -Ch. 1737-1812）を知ったことである。ルヴェクとは、エカテリーナ二世の委嘱を受けて『ロシア史』全5巻（1782-83年）を編纂した人物である。しかし、彼の『ロシア史』は、ピョートル一世の意義を過小評価し、エカテリーナの怒りを買い、彼女をして「解毒剤」としての『ロシア史に関する覚書』を書かせるに至らしめた人物である[12]。『手紙』の中でカラムジンは彼の『ロシア史』をいくつかの欠点はあるが、哲学的な批判精神で書かれていると評価する一方、「他の国民を模倣したに過ぎない」という彼のピョートル一世に対する低い評価には異議を唱え、次のように述べている。

私はロシア人からもそのような意見を聞いた。そしてそれを聞くたびに悔しくてならなかった。教育あるいは啓蒙の道はどの国民にとっても「同じ」である。……ドイツ人、フランス人、イギリス人は、ロシア人より少なくとも六世紀進んでいた。ピョートルはわれわれをその強力な手で動かした。そしてわれわれは数年でほとんど彼らに追いついた。ロシア人の性格の変化やロシア人の道徳的特徴の喪失についてのあらゆる哀れな「愁訴」は、ほかでもない、冗談か、よく考えてみないことから生じているのである。……「民族的な」ものはすべて、「人間的なもの」に比べたら問題にならない。肝要なことは「人間であること」であって、スラヴ人であることではない[13]。

ここで述べられているのは、啓蒙主義のオプチミズムである。彼はピョートル一世の改革の結果、「ロシアにおける道徳の退廃」が始まったと主張したシチェルバートフのような立場を批判し、ピョートル改革の普遍性を強調している。しかし、シチェルバートフの後を襲い、修史官として『ロシア国家の歴史』を著すころには彼の立場は民族の独自性を強調する立場へと転換する[14]。フランス革命がジャコバン独裁へといたる過程において彼は「フランスにおいては人民（ナロード）が最も恐ろしい専制君主となっ

た」[15] と述べ、以来、ロシアだけではなく、ヨーロッパで「デモクラシー」は、暴政と同義の用語となっていく[16]。後に見るように、ゲルツェンにおいてもこの痕跡は、大きいと言わねばならない。

② プーシキンの遺産

若きゲルツェンは、論文「1月28日」(1833年)において、ピョートルを規則正しい惑星の運行の中に突如として現れた彗星になぞらえ、彼が果たした役割は、宗教改革やフランス革命と比肩すべき革命的なものであったと見なす。しかし冒頭の二つのエピグラフ「この人物は、並みの尺度を越えている」(ロモノーソフ)「そして革命が人の姿となった」(ヴィクトル・クザン)が示唆しているように、ピョートル改革をフランス革命と対比するという視点は、ゲルツェンに始まるのではない。それは、すでに18世紀以来、内外の知識人の間に見られたものである[17]。

ゲルツェン自身が『過去と思索』の中で、少年時代の「政治的目覚め」について触れ、デカブリストの蜂起やプーシキンの詩が大きな影響を与えたことを認めている。プーシキンが「貴族について」(1830年代)という小論のなかで「ピョートル1世はロベスピエールであると同時にナポレオン(革命の体現者)である」[18] と述べていることは、同時代の了解事項であった。すなわち「自由」という頌詩の作者であるプーシキンにおいても、ピョートル一世の作りあげた「帝国」は、「自由」と並立する二大テーマであったといえる[19]。『ピョートル一世史』などピョートル一世に関して数々の著述をなしたプーシキンは、また同時にフランス革命についてもいくつか文章を書いている。ただし、それらはいずれも断片的であり、ピョートルに関するものとくらべれば、明らかに比重は低い。読書メモと思われる断章の中に、「ヨーロッパの解放」と題するフランス語の小文があり、その中で次のように述べている。

> ヨーロッパの解放はロシアからもたらされるだろう。なぜなら貴族に対する偏見が存在しないのはロシアにおいてだけであるからだ。他国においては、貴族は信ぜられているのだ。あるものは軽蔑しながら、あるものは憎みながら、またあるものはそこから利益や虚栄を引き出そうとしながら。ロシアにおいてこのようなことはない。貴族は信じられていないからだ[20]。

この一文の中には、フランス革命がロシアの貴族知識人にもたらした「屈折」があらわれている。すなわちロシアの貴族は「余計もの」であるという自意識である。

フェドートフはプーシキンの創作のなかで、強い緊張感を生み出していた主要なものの一つが、「帝国」と「自由」の緊張関係であったと述べ、さらに次のように指摘する。

> 100年にわたって帝国を建設し、支えてきた人々は自由を抑圧し、一方、自由のために戦ってきた人々は帝国を破壊してきた。君主制国家は、このような自殺行為と思われる精神と権力との反目に耐えることが出来なかった。帝国ロシアの崩壊という深刻な事態がもたらされるとするなら、それは何よりもこうした内部のガンとその侵蝕によるものだと考えられたのである。晩年のプーシキンは、保守的でかつ自由自立的なロシアというイメージを抱いていた。自由な、国家なきロシアという観念はゲルツェンのサークルやチャアダーエフの哲学書簡などとともに1830年代になって生まれるのである[21]。

確かにゲルツェンの中に、無政府主義的ともいえる国家に対する嫌悪感を見出すことは、容易である。だが、次に検討するように、彼においても、もう一方ではピョートル一世の遺産としての「帝国」に独自の価値を見出そうとする志向も存在したのである。

③ 啓蒙絶対主義の遺産

ウィタカーは、18世紀ロシアの専制君主制と19世紀のそれとを峻別すべきだと唱え、両者を区別する要素として、18世紀のロシアにおける選挙的要素を指摘する[22]。こうした観点から言えば、19世紀初めの西欧派知識人におけるピョートル評価には、シュラペントフのいうように、ある共通の了解事項が存在していたと言わねばならない。すなわち西欧派は、ピョートル大帝による改革を、ロシアが西欧と同類であることの証として考え、進歩の原動力として政府を見ようとしていた。その際、革命はむしろ進歩の阻害要因として理解されるのである。この点では、初期西欧派は、スラヴ派よりもむしろ決定的に君主制論者であった。ゲルツェンの場合も例外

ではない。彼は「ロシアの立法に関する雑感」(1836年)の中で次のように論じている。

> 市民社会のなかでは(dans le fait social 社会問題においては)[23]、進歩の原理を代表するのは政府であって、人民ではない。政府は(du progrès 進歩の)運動の公式、社会思想の表現、その歴史的形態、不変の事実である。ロシアにおいてほど政府が人民の前に立っている国はどこにもない。
>
> ……わが国の立法のヨーロッパ的な時代における最も早くからの努力の中には、エカテリーナ二世によって輝かしく発展させられた二つの要素が存在している。この二つの要素は、政府がいかに人民の上に立ち、人民を向上させようと欲しているかを示すより良い証拠である。私が言っているのは、合議制の原則と選挙についてのことである。唯一行政権力のみが個人に依存してきた。司法と立法は常に属人的にではなく、(定められた限界内において)職務に依存してきた。(Ⅰ・321-323 補足原文)

ここに見られるのはまさしく18世紀啓蒙絶対主義の遺産である。この論文を書いた翌年の1837年、当時ゲルツェンが流刑されていたヴャトカに、皇太子アレクサンドル・ニコラエヴィッチ(後のアレクサンドル2世)が来訪し、彼はその接待に駆り出され、皇太子に個人的な親近感を抱く境遇にもあった。さらに同年、赴任したばかりのヴャトカ県の知事から、トクヴィルの著書『アメリカの民主政治』を贈呈されている。「雑感」の中でゲルツェンは、ロシアをアメリカと比較して次のように述べているが、トクヴィルの著書を読む直前だけに、興味深い。

> ロシアとアメリカは人類のこれからの法のありかたを告げる二つの国である。ロシアは、人民を基盤とした専制が高度に発展した国として。アメリカは、君主制を基盤とした民主制が高度に発展した国として。(Ⅰ・323)

この文脈において、民主制はあくまで政体論としての意味を示しているだけで、極めて古典的な概念として使用されていることが分る。つまり「人

民を基盤とした専制」という概念とほぼ等価値で用いられている。それは、まさにウィタカーが主張しているように、ロシアの専制が「選挙的要素」を前提としているという確信に基づくものであった。

18世紀の啓蒙絶対主義の伝統はカラムジンを介して、19世紀知識人の思考の枠組みに影響を与えている。教育大臣セルゲイ・ウヴァーロフについて見てみよう。彼はニコライ一世の下で、正教・専制政治・国民性の三位一体を柱とする官製国民性論を提唱した人物として悪評が高いが、ウィタカーによれば、彼こそ教育が社会の発展に根本的な役割をもつことを自覚し、教育改革を実現した数少ない政治家の一人であった。彼が目標としたのは、「ヨーロッパの啓蒙思想の利点を保持すること、ロシアの知的生活を他国民の水準にまで高めると同時に、ロシアの国民的独自性を形成すること、すなわちロシア独自の法原理のもとにロシアを基礎付けること」であった[24]。つまりウヴァーロフは、「進歩の法則」にロシアを従わせようとしたのであり、その際、条件として考えなければならない二つの前提を自覚していたのである。一つは「専制政治はロシアの政治的存在に不可欠のもの sine quo non となっている」ということ、もう一つは「西欧の先進性の認識」をもつことであった。これらの前提を踏まえて、ロシアを「市民社会の入り口」に導くには、すべての階級の上にたつツァーリの家父長的で私心のない指導性が期待されたのである[25]。こうした考えは、18世紀ロシアの啓蒙思想家につながる思想である。例えば、エカテリーナ二世時代の文筆家エラーギン（Иван Перфельевич Елагин 1725-1794）は「公共の福祉 общественное блаженство」を実現するという観点から見れば、民主制よりも君主制の方が優位にあると考え、君主制の下で、諸関係が自然法と社会契約の諸原則の理想的な結合に基づいて打ち立てられている場合に、はじめて「公共の福祉」は可能なのだと主張する[26]。フリーメイソンに関わっていたエラーギンの立場は、国家を倫理化するという主張であり、制度論、機能論としての国家よりも、君主の人格に重点をおいた思想である。後に「アレクサンドル二世への手紙」を取り上げ、具体的に検討するが、君主個人に宛てた書簡という形式をもって改革を呼びかけるゲルツェンにもこうした啓蒙絶対主義の遺産が、根強く存在していたといわねばならない。

(2) 西欧派とスラヴ派論争——18世紀の遺産の正負をめぐる論争

① ピョートル一世観とフランス革命観の動揺

これまで検討してきたゲルツェンの作品は、いずれも流刑時代に書かれたものである。チャアダーエフの『哲学書簡』を読んだのは、1836年ヴャトカにおいてであり、「ロシアの立法に関する雑感」を執筆したのも、同年であった。チェシコフスキを読んでヘーゲル左派に共感するのは、1839年ウラジーミルにおいてである。同年末にはバクーニン、ベリンスキイ、グラノーフスキイらと知りあい、モスクワの友人たちと活発な手紙の交換を行っている。1840年にモスクワ帰還が許されると、チャアダーエフを訪ねたり、ホミャコーフと出会ったりするが、父親の希望と当局の意図が図らずも一致した結果、一時サンクト・ペテルブルクに赴き、内務省に勤務することになる。しかし不本意な勤務は一年余りで終止符を打つ。1841年(29歳)6月体制批判の廉で、再度ノヴゴロドへ追放処分となったからである。だが病気を理由に間もなくモスクワ居住を許され、1842年から1847年にかけて、ゲルツェンはロシアにおける知的活動の最盛期を迎えることになる。この間の彼の意識を規定していたのは、深いペシミズムであり、それは時代を「過渡期」ととらえ、自らの存在を「余計もの」ととらえる感覚と結びついていた。こうした彼の歴史感覚は歴史意識にも影響を及ぼしている。1842年にノヴゴロドで書かれた「モスクワとペテルブルク」と題する小論では、ペテルブルクの人為性に着目し、「それはピョートル一世についての思い出以外なんの記憶ももたない。1世紀の過去をもつが、そこには歴史はなく、未来もない。……ピョートルがロシアにとって唯一の救いは、ロシアであることを止めることだと悟り、わが国を世界史の中へ推し進めようと決断して以来、ペテルブルクの必要性とモスクワの不要性が定まったのだ」と言う。すなわちペテルブルクの「必要性」とは、過去と未来をもたない「余計もの」の一時的属性である(II・34-36)。

当時の『日記』を見ると、ピョートル一世やフランス革命の遺産をめぐる彼の評価に大きな動揺が見られる。だがこうした動揺は、ゲルツェンだけのものではなかった。

ゲルツェンと親交のあったベリンスキイも初期にはフランス革命に対して批判的な態度をとっていた。フランスに起こったあらゆる革命も、専制のロシアにおけるほどの自由を与えていないと彼は言う[27]。「ロシアの希望のすべては啓蒙にあるのであって、クーデタや革命あるいは憲法にある

のではない」[28]。しかし1841年の秋になると、ベリンスキイの態度は変わる。友人に宛てた手紙の中で「社会主義」[29]の意義を唱え、「否定こそ我が神であり、歴史におけるわが英雄たちとは、ルター、ヴォルテール、百科全書派、テロリスト、バイロン(《カイン》)など古いものの破壊者である」[30]と述べて、「ギロチンの18世紀」を称えている[31]。翌1842年秋にはゲルツェンに宛てた手紙でロベスピエールを賞賛した。この手紙を読んだゲルツェンは、日記に次のように記した。

> ベリンスキイから手紙。ファナチックで過激な人物だ。だがいつも開けっぴろげで、力強く、精力的だ。彼に対しては好きか嫌いかのどちらかの態度をとることが出来るのであって、中間はありえない。私は彼が本当に好きだ。こういった種類の人物としてはロベスピエールがいる。彼らにとって人間は何ほどのものでもない。信念が全てなのだ。(1842年11月14日の「日記」・II・242)

② 「劇薬」としてのピョートル一世とフランス革命

1843年7月16日の日記で、ゲルツェンはシュロッサーの『18世紀史』を読んだと書き、「偉大なる18世紀はその終末と同様、極端な形で始まった。だが全く対立する意味で」と記している。終末の「極端」とは言うまでもなくフランス革命であり、始まりの「極端」とは、ピョートル一世の事業である。彼によれば、ピョートル一世とフリードリヒ二世は「革命家」であり、「天才」であって、一般の絶対君主とは異なる例外的な存在なのである(II・300-301)。だが彼は次のようにも言う。

> 過去の基盤に依存しない物質的で実務的な圧制は、国家を動かす革命的で独裁的なものであった。それは、国家が自由に発展しないようにするためのものであった。だが、その鞭の下から出てきたものは、外面的にはヨーロッパ主義であり、内面的には人間性の全くの欠如であった。こうした現代の特徴はピョートル一世に由来する。にもかかわらず、この時代における彼の存在は、偉大なものであり、彼の思想も偉大である。その思想はまだ完全には現実化されていない。だがおそらく、将来にその実現がなされるであろう。(II・300)

このようにゲルツェンは、ピョートル一世をフランス革命と比肩し、その意義を強調する一方、その「劇薬」[32] としての過酷さに言及するのである。1844年4月3日の日記では、「劇薬」の必要性と意義を認める一方、それに対する嫌悪感を隠していない。

> ピョートル一世に関しては、様々なアネクドートがある。野性の虎と天才との奇妙な結合。……マラー、ロベスピエール、フキエ・タンヴィルも一緒なのだ。国民公会やピョートルという恐ろしい現象を理解し認め正当に評価するだけではなく、それらに敬意を表することは義務である。さらに彼らの凶悪な振る舞いの中にも人は偉大さの印を見失ってはならない。しかし1793年の役者たちのすべてを好むわけにはいかない。ピョートルについても同じことである。(II・348)

(3) 二月革命の渦中で——18世紀の遺産に対する幻滅

① ロシアへの精神的回帰

1847年1月、ゲルツェンは家族と共に、モスクワを出発してパリへ向かう。ドイツ各地を旅行したあと、3月に「胸の高鳴りを覚えながら」パリに入った(V・141)。まさに「1847年のパリは保守主義者にとっては妖怪であり、過激派にとってはメッカであった」[33]。当時のフランスは物質文明という点で繁栄を極めているように思われた。翌年の二月革命で焦点となるプロレタリアートや貧困の問題は、まだ内に孕まれたままで表面化していなかった。しかしゲルツェンの慧眼は、こうした繁栄の中に憧憬を幻滅に変えてしまう要素を見出していた。プチブル的俗物根性(メシチャンストヴォ)の支配であった。パリ到着後まもなく、彼はモスクワ時代の友人に宛てた手紙で書いている。

> パリでは圧倒的多数がメシチャンストヴォ[34] に属している。大衆文芸や15の劇場のなかには明らかにメシチャンストヴォの低俗さが反映されている。……メシチャニンたちが欲しているのは自分なのだ。理想のなかに自己発見をすることなのだ。……メシチャニンたちは、常にモラルを重んじているわけではない。それを重んずるのは、もっぱら妻や家族のためだけである。(XXIII・20)

イヴァノフ・ラズムニクによれば、メシチャンストヴォという語に倫理的意義を込めて普及させたのが、ほかならぬゲルツェンであった[35]。ゲルツェンはアンチ・メシチャンストヴォを「教養あるロシア」の指標としたのであった。二月革命の推移を体験する前から、彼には「パリでの生活は憂鬱で耐えがたいものとなった」(V・245)。西欧への幻滅はロシアへの期待を醸成する。後年(1867年)バクーニンに宛てた手紙で二月革命以前の会話を回想して次のように書いている。

> 二月革命以前に我われが交わした会話を思い起こしてみよう。その会話のなかで私は解剖学者のように、西欧という《老人》の死が間近にせまっていると指摘した。一方、君は希望と期待をもってスラヴという《未成年》の初々しい生命力が成長しつつあることを示した。私はスラヴという点ではあまり確信がなかったが、ロシアに限って言えば、その社会主義的萌芽に確信をもっていた。(XIX・289)

アーネンコフも当時のゲルツェンが、スラヴ主義者が提起した問題を西欧主義者も自分の立場から考え直してみるべき時が来たと力説していたことを友人への手紙で証言している[36]。このように、ゲルツェンの「ロシア社会主義」論の萌芽は、すでに二月革命を経験する以前に胚胎していたということができる。しかし、萌芽は二月革命の嵐の中で、しばらくは地中に埋もれたままであった。

② ピョートル一世とフランス革命の帰結としての「現代」

二月革命は、彼独自の思想の誕生にとって、産みの苦しみとなった。革命の勃発からナポレオン三世の登場に至る歴史の展開の中に、彼は18世紀の遺産の帰結を見たと言ってよい。『向う岸から』の中で次のように書いている。

> 18世紀の末頃、ヨーロッパという名のシジフォスは、三つの異なる世界の残骸と破片からなる自らの重い石を頂上まで転がして運び上げた。石は、左右に揺らぎながらも止まろうしているかに思われた。だがそうはならなかった。石は転がり落ち始めた。……哀れなシジフォスは、それを見てわが目を疑った。……彼はあんなにも人

類の進歩の完成を信じていたのに。彼はあれほど哲学的に、あれほど賢明に学問的に、同時代の人びとに期待していたのに。それでもやはり彼の期待は裏切られたのだ。(VI・110)

彼が文中で述べている「三つの異なる世界」とは、ローマ的世界・ゲルマン的世界・キリスト教的世界のことであり、これらの結晶であるヨーロッパ文明(VI・136)は、すでにその役割を終えたとゲルツェンは考える。

二月革命の嵐の後、彼は「ロシアへの精神的回帰」の道を歩み始め、「ロシア」と「社会主義」との結びつきを模索した。この期間に彼が書きつづけた作品『フランス・イタリアからの手紙』(1847～52年)・『向う岸から』(1847～50年)・『ロシア』(1849年)・『ロシアにおける革命思想の発達について』(1851年)などは、今日から見れば「回帰」の道のりの道標とも言えるものであった。

これらの中では、18世紀の遺産と見られる公共の福祉、共和制、代議制、市民の権利などが市民革命によって生まれた国家そのものとともに厳しく見直される。『向う岸から』の中では、アメリカ合衆国も、ヨーロッパと「同じ封建的・キリスト教的テクストの最新のこぎれいな刊行物であるが、それでもまだ粗雑な英語の翻訳版だ」(VI・68)と規定され、デモクラシーさえも批判の的となる。

デモクラシーとは本質上、現在のことがらである。それは闘争であり、過去に発達したヒエラルキーや社会的不正の否定であり、時代遅れになった諸形式を焼き尽くし、焼き尽くすものがなくなってしまえば当然自らも消えてしまう浄火なのだ。デモクラシーは何も創造することができない。創造はその任務ではないからだ。最後の敵が死んでしまえば、それは無意味なものとなってしまう。デモクラットとは(クロムウェルの言葉を借りて言えば)、自分たちの欲しないことだけは知っているが、**自分たちの欲することを知らない人びとなのだ。**(VI・77 強調・補足とも原文)

こうしたデモクラシー観は、自由主義者観やブルジョア観とも通底する。『フランス・イタリアからの手紙』では次のような見解が見られる。

自由主義者とは、政治におけるプロテスタントであり、それ自身においては恐ろしく保守主義者なのだ。……自由主義者は自由を失うことを恐れている。自由がないというのに。彼らは生産活動に対する政府の介入を恐れている。政府は今やあらゆることに介入しているというのに。彼らは個人の権利を失うことを恐れている。我われはまだそれらを獲得しなければならないというのに。(V・13)

ブルジョアジーは偉大な過去もいかなる未来ももたない。それは否定として、過渡として、アンチテーゼとして、自らを守るものとして、一時的に良かっただけのものだ。(V・34)

このように二月革命を経験したゲルツェンは、ピョートル一世とフランス革命の帰結としての「現代」を徹底的に批判する姿勢を示した。だが、留意しておかねばならないのは、「現代」批判の一方で、18世紀の遺産そのものについては、相変わらず高い評価が維持されていた点である。彼はそれと「現代」との落差を指摘したのである。その典型例が1850年3月、コメディ・フランセーズで上演されたF・ポンサールの『シャルロット・コルデー』に対する劇評である。彼はこの小文の中で青年時のフランス革命賞賛の態度を総括し、「歴史のこの厳粛なる日々の事件と人びとは、人類の道を照らし出す役目を負った灯台のようなものとして残されている」(VI・239)と述べ、フランス革命の事業と英雄たちをたたえ、19世紀の現実との落差を指摘している(VI・239-42)。だが、落差は埋められねばならない。彼は「ロシアへの精神的回帰」の過程で、ロシア史への関心を再燃させたのであった。導き出された結論の一つが、ピョートル一世とフランス革命の帰結は「国家の肥大化」という病であるというものであった。『ロシアにおける革命思想の発達について』の中で彼は言う。

「ロシアの歴史は、スラヴ国家の発生学に他ならない」(VII・24)、「ペテルブルク時代とモスクワ時代を結ぶのは一つの思想だけである。それは国家の肥大化という思想 la pensée d'agrandissment de l'État である」(VII・42)。ゲルツェンは「国家の肥大化」の背後に「観念の肥大化」を見ている。そして、それに対して「自然の力 стихия であり、大洋のごときものである」ロシア人民を対置したのであった(VI・80)。『人民の声』紙に連載された論文『ロシア』は、彼が「ロシア社会主義」論を初めて本格的に論じたも

のであったが、その中で彼は「ロシア」と「人民」について次のような見解を展開する。

ロシアは現代のヨーロッパにおいて、力に満ちた若い人民、過去はないけれども、洋々たる未来がある人民をあらわしている。ロシアが将来の発展に際して、西欧の諸国民が辿った道筋をすべて辿らねばならないとする考えには、全く根拠がない。なるほど西欧の諸国民は、その発展の中で、苦労しながら一定の社会的理想を形成してきた。だが、ロシアは現状においてすら、むしろ西欧諸国よりもその理想に近いところにあるからだ。「西欧にとっては、その努力目標であり、期待に過ぎないものが、それをもって我々が始めているところの、すでに現実的事実なのだ」(VI・204)。

西欧の理想に近い「現実的事実」とは何かと言えば、それはロシアの農村共同体の存在にほかならない。しかし、この共同体には一定の発展と改革が必要である。現状のままでは、個人と社会の諸問題に満足な解決を与えはしない。個性(リーチノスチ)が共同体の中で抑えられ、それに吸収されてしまっているからである。共同体の中に吸収されてしまっている個性原理を復活させ、「革命の酵母」となるべき存在は、「中層の貴族」である(VI・215)。

ここでは、「ロシア社会主義」論の中核をなすロシアの「若さ」「共同体」「個性」という三つの概念が明示されている。しかしこの段階で特に重要なのは、ロシアの「若さ」という概念であった。それはゲルツェンがイタリア滞在中に確信した西欧ブルジョア文明に汚されていない「処女性」という考えをさらに発展させたものと言い得るだろう。

> 私にはロシアの生活のなかに共同体よりももっと高貴で、権力よりももっと力強い何ものかが存在しているように思われる。この「何ものか」を言葉で表現することは難しい。ましてやそれを具体的に指差して示すことは一層困難である。私が言おうとしていることは、モンゴル軍団やドイツ官僚制の軛、タタールによる東からの鞭、西からの伍長の鞭(ナポレオンの侵入をさす)、こうしたものの下でも奇跡的にロシア人民を支えてきた、内的でまだ十分に自覚されていない力についてである。(VI・199、補足引用者)

ロシア人民の「若さ」という概念についてスミルノワは次のように指摘

している。

> 1848年の終りの時点では、ゲルツェンは未だロシアにおける社会主義の現実的可能性を、ヨーロッパよりも少ないと見ていた。なぜかと言えば、ロシアには《二つの過去》から脱却する必要があったからである。しかし論文「ロシア」においてこうした判断は変更を加えられる。ロシアには現在を束縛する過去がないという、いわゆるロシアの《若さ》についての概念は、この論文以降、彼の《ロシア社会主義》の最も基本概念の一つになってゆくのである(37)。

彼女の見解は、思想の展開をあまりにも単線的かつ平面的にとらえ過ぎていると言わざるをえない。文中の「二つの過去」とは、ピョートル一世以前の「過去」とピョートル以後の「過去」を指しているが、これら「二つの過去」は、ロシアの「若さ」という概念と矛盾する形でゲルツェンに意識されていたわけではない。むしろ、相互補完的に、ゲルツェンの内部に存在していたと言うべきである。論文は、ヨーロッパにルーシを知らせることを主眼としていた。したがってロシアの「若さ」という概念が前面に押し出されているに過ぎないのである。「二つの過去」は後景に退いてはいるが、無視されているわけではない。「人民の生活に根付いていない現在の行政を撤廃する」という主張がその証左である。彼はヨーロッパに対しては、ロシアの「若さ」の概念を前面に押し出し、ロシアに対しては「二つの過去」の概念を前面に押し出して、それらがロシア人民の若々しいエネルギーを抑えつけていると説くのである。

1850年は西欧文明に対する絶望感がますます深まり、逆にロシアへの希望が高まった年であった。この一年間、彼はほとんどロシアに関する著述に没頭し、西欧の諸問題に対しては、発言を差し控えている。1850年3月初旬に彼はヘスに宛てて「……私はますますペシミズムの淵に沈みこんでいくようです」(XXIII•290)と書き、一カ月後のヘルヴェーク宛ての書簡では全く断定的に、旧世界は既に死んだと語り、「1850年には—少し先回りして—葬儀の後に続く日が始まることを予想して、遺産とその後継者のことについて考えねばならない」(XXIII・326)と述べている。

『ロシアにおける革命思想の発達について』のフランス語版(1853年)序文では、ロシアは「生に対する二つの権利」、「若さ」と「社会主義的要

素」をもっていると述べている（VII・147)。

「若さ」という点から見れば、ロシア史は現在までのところ、「スラヴ国家の胚胎形成の歴史」であり、「かすかにちらつきはじめた不確かな未来への道程」に過ぎない（VII・153)。ロシア人民の「若さ」とは換言すれば、「胎生的」段階にとどまっているロシアの未発達な状態であり、その政治的・経済的後進性と未来への発展の潜在的可能性との間に立った矛盾の意識の表現であった。ロシアの「生に対する」第二の権利、すなわち「社会主義的要素」とは、農村共同体のことである。しかしこれについて、この著述の中では、農村共同体がロシア史の過程の中で常に保持されてきたと確認し、具体的な分析を行わないまま、農村共同体の存在が、ロシアにおける社会主義への移行を容易にする基盤だと結論づけている。

ゲルツェンは農奴制、専制政治、官僚制などの否定的側面をロシア固有のものとは考えていない。それらは、ピョートル一世の負の遺産である。彼がドイツ風の官僚制を植え付け、農奴制を法制化した結果、ロシアは「二つのロシア」に分断された。ロシア人を主たる読者と想定して書かれた最も初期の論文「洗礼を受けた財産」（1853 年）の中では次のように述べる。

> 二つのロシアは 18 世紀初め以来、互いに敵対しあうようになった。一方には政府・皇帝・貴族・富裕者の、軍隊のみならずドイツから移入されたあらゆる官僚的・警察的姦計に取り囲まれたロシアがある。そして他方には、暗愚な人民の、貧しい農村共同体の、民主的で、無防備で、突然とらえられ全く戦うことなくして征服されたルーシがある。（XII・114）

デカブリスト運動の失敗は「二つのロシア」の「完全なる分裂」を示したものであった。デカブリストの敗北後は「いかなる幻想もすでに不可能であった。人民は 12 月 14 日の冷淡な傍観者としてとどまったのだ」(VII・214)。

ゲルツェンは「二つのロシア」の対立を止揚するためには、「土地所有制そのものを革命に巻き込むこと」が必要であると考えた（VII・199)。ロシア農民は「他ならぬ土地を所有しながら自由でありたいと願っている」（VII・200）からである。こうして「農民の土地に対する権利」という主張が明確化される。

(4) クリミア戦争の渦中で——18世紀の遺産の再評価

1852年は、ゲルツェンの思想に転機をもたらす年となった。国際政治の場面では、ロシアと西欧諸国との衝突の兆しが見え始めていた。「ロシア人民と社会主義」(1851年9月)の中でゲルツェンは、既に次のような見解を述べている。

> ヨーロッパは恐ろしいカタストロフに近づきつつある。中世的世界は崩壊し、封建的世界は終りを告げている。政治的な革命や宗教的な革命は、自らの無力という重圧のもとで力を失ってしまっている。それらは偉大な出来事だった。しかし、その課題は達成されなかった。それらの革命は玉座や祭壇への信仰を破壊した。しかし自由を実現したのではなかった。すなわち革命は実現不可能な欲望に火を点けたのである。議会主義とかプロテスタンティズムといったものは、すべて単なる執行猶予、一時的救済、死と再生に対する無力な砦にすぎなかった。(VII・309)

1852年1月ルイ・ナポレオンによる新憲法の発布によって、パリは自由を失った。この年8月、ゲルツェンはパリを捨て、ロンドンに移住。1853年に自由ロシア印刷所を設立し、本格的な言論活動の準備を始めた。この年、ついにクリミア戦争が勃発した[38]。この戦争がもたらす「混乱とカオス」を、ゲルツェンはロシア変革の好機ととらえた。ピョートル一世とフランス革命が達成したのは、自由ではなかった。それらは「国家の肥大化」という共通の病をもたらした。ヨーロッパのカタストロフとは、ペテルブルクのカタストロフに他ならない。

1854年、英仏の参戦により、クリミア戦争の展開がロシアにとって不利となり始めたころ、ゲルツェンは、リントンに宛てた書簡体論文「ロシアと旧世界」を著した。論文は三つの手紙からなっている。第一と第二の手紙では、ヨーロッパ世界の閉塞状況が指摘され、再生のためには、非ヨーロッパ的な力が必要であると論ずる。またヨーロッパで生まれた社会主義の理念は、非ヨーロッパ世界で現実化される可能性が高いという。現代ヨーロッパが直面している問題は、社会主義とロシアの問題であるが、この二つの問題は本質的には一つの問題だとして、「ロシア社会主義」に言及する。第三の手紙では、この問題提起に答え、より具体的に論じている。

過去において、ロシアの「若さ」を象徴した人物は、ピョートル一世であった。彼は「西欧諸国の老衰と統治者の退廃を完全によく理解し」、かつ「アジアとヨーロッパに対してロシアが演じ得る役割を弁えていた」(XII・150)。しかしその反面、彼が行ったことは「モスクワ・ルーシの**非国民化** la dénationalisation de la Russie moscovite であった」(強調原文)。ペテルブルクの政府に対して人民は、その豊かで生き生きとした基盤を不承不承に与え、「ドイツ的な専制政治に独特な性格を刻み込んでいる」。言わば「人民はペテルブルクの専制政治を愛してはいないが、それでもなおその中に自分たちの国民的統一と力の代表者を見出している」(XII・151)。

ペテルブルクの政体には、別の意義もある。それは「粗雑な実験であり、一時的な形態にすぎない」が、そこでロシアは「ヨーロッパがたどった発展のすべての段階」すなわち「イギリスの立憲政治から(17)93年の(最高存在)崇拝に至るまでの自由主義のあらゆる段階」を経験したのであった。他者によってなされたことでも、もしそれを理解するなら、それは自らがなしたに等しい価値をもつ。それこそが「進歩における連帯」であり、「人類の世襲財産」ということなのだ。だが我々が悲しい努力の末にやっとたどりついたのは「半解決」の状態に過ぎない(XII・151-153、補足引用者)。

ピョートル一世の「革命」は、人民を伝統的な共同体の中に放置し、「ビザンツ・モスクワ風の伝統」を荒々しい手段で振り切った。彼はテロリストの過酷さをもって、新しい貴族階級を作り、官僚機構を整えた。その結果生まれたのは、「イヴァン雷帝とモンテスキューを混合したような」奇妙な政体であった(XII・158)。それは個人主義の原理を「革命の酵母」とすることでビザンツやモスクワの古い因習からロシアを解放した。だが、中央集権化が進むに連れ、この政体は個人主義の原理を徐々に否定していった。まさに1848年の二月革命が自由の追求から始まって、ナポレオン三世の専制で終わったように。

ゲルツェンによれば、「個人の権利という思想が生まれるのは貴族やブルジョアジーといった階層においてだけである」。だが「ロシアにおいてはブルジョアジーの影響力は、ヨーロッパと比べると少ない。工業が未発達であるという理由からだけではなく、彼らの上層が簡単に貴族化してしまうからである。……わが国のブルジョアジーはまだ道徳的な力になっていな

い」。したがって当面の革命思想の担い手は、道徳的な力をもつ「教養ある少数者」に求めねばならない。教養の中身とは「政治的には社会主義、哲学的には無神論」である（XII•160-161）。彼はこうした立論に基づき、第二のピョートル一世登場の可能性に言及する。

> もし真に活動的な人物がロシアの帝位に就くならば、彼は解放運動の先頭に立ち、真の栄誉を担ってペテルブルク時代の終末を飾り、こうした人物が不在であるために避けがたく帝位に纏わりついている混乱に方向性を与えることが出来るだろう。このために必要とされるのは、ピョートル一世であって、ニコライではない。（XII・161-162）

ゲルツェンが第二のピョートル一世に期待したのは、ペテルブルクの政体を解体する事業であった。「プリンシプルとかドグマではなく、暴力 une force に過ぎない」ロシアの専制政治は、西欧の革命思想との接触の中で早晩、自己崩壊していくだろう。だがゲルツェンは「過渡期」という歴史意識において、「余計もの」としての帝国ロシアに次のように「専制革命」の課題を与えた。

> 革命のヨーロッパに対し、帝政ロシアは二つのチャンスを持っている。ひとつは自ら民主的・社会主義的専制政治へと変わってゆくことである。私はそれが全く不可能であるとは考えない。それはツァリーズムの性格を完全に変えてしまうだろう。それとは異なるもうひとつの場合は、農民革命あるいは軍の反乱が専制政治を打ち倒さない間に、自らの影響力を徐々に弱め、ペテルブルクにおいて化石化し、死に絶えることである。（XII・163-164）

1856年3月パリ条約によって、正式に戦争に終止符が打たれると、ロシア国内のゲルツェンの友人達は急速にゲルツェンに接近し始めた。ゲルツェンのもとに届くロシアからの反響は、『北極星』に収まりきらず、1856年7月に新たに『ロシアからの声』と題する文集が刊行された。同誌の第一号にはゲルツェンに宛てた「編集者への手紙」が掲載されている。手紙の筆者は、それぞれペテルブルクとモスクワの自由主義者を代表するカ

ヴェーリンとチチェーリンであった。二人は当局に対する配慮から、匿名で手紙末尾にルースキー・リベラルと署名した[39]。手紙の内容は要約すると、以下のようなものであった。

1．ロシアの現実は、暴力革命とは無縁の状態にある。改革の気運は上からあらわれはじめ、知識人の活動はますます活発化している。「秘密結社・革命・専制権力の制限」などについて語る人は誰もいない。
2．批判すべき対象は、腐敗した官僚制である。それは、ツァーリとロシア国民との間に割り込んで、両者の意志疎通を妨げている。
3．ロシア自由主義は西欧主義的立場を堅持する。クリミア戦争の状況を見ても、ゲルツェンが言うようにヨーロッパは「腐朽しつつある屍体」であるどころか、ロシアにとって相変わらず学ぶべき対象である。
4．ゲルツェンが社会主義的原理の象徴と見ている農村共同体的原理は、夢想の産物である。それは、われわれに何の現実的利益ももたらさぬ「半野蛮の遺制」である。
5．ゲルツェンの革命主義は、歴史や伝統を無視しており、ロシアの現実になじまない。歴史発展の根本原理は「漸進の法則」である。しかし、ゲルツェンはそれを見失っている。
6．国民はすべて一定の生の形式にしたがって成長するのであって、歴史における飛躍はありえない。ゲルツェンは歴史の法則をわきまえぬ「浅薄な18世紀の思想家たちの後継者」である[40]。

カヴェーリンとミリューチン兄弟を中心とするペテルブルクの自由主義者たちは、そのほとんどが、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の主宰する「ロシア地理学協会」に加入していた。このことは、ロシア自由主義者と政府内部の自由派との親近性を物語っている。カヴェーリンは、既に1848年にグラノーフスキイに宛てた手紙で、ロシアには進歩的・啓蒙的絶対主義が必要であると指摘していた[41]。グラノーフスキイ自身も1855年10月2日付けのカヴェーリン宛ての手紙で「現在、我々にとって有効であると思われるのはピョートル大帝その人だけではない。彼の強制力もだ」と述べている[42]。同様の期待は、モスクワにおけるスタンケーヴィチ・サー

クル員であったチチェーリンにも見出すことが出来る。1856年に刊行されたその著書『17世紀におけるロシアの地方制度』の中で、彼はロシアにおいて国家が果たした役割は西欧よりもずっと大きなものであり、国家が全てのものの源泉であると説いている(43)。

「編集者への手紙」は、ゲルツェンにプロパガンダの「調子と傾向を変えること」を呼びかけたものであった(44)。しかし、ロシアの友人達の反応にゲルツェンは苛立ちを隠さなかった。1856年10月25日付けで書かれた『洗礼を受けた財産』第二版序文で彼は次のように言明した。

> 不可欠な事柄を前にしてのこうした臆病や気の弱い躊躇いが、農民たちの斧による問題解決にまで事態を進行させるのだと私たちが語り、政府に対して農民たちを将来の犯罪から救うようにと懇願した時、善良なる人々（自由主義者たち）は恐怖の叫び声を上げ、ゲルツェンは流血の手段を取りたがっていると言って、私を非難した。このことは嘘であり、意図的な無理解なのだ。……私たちは実に多くのことを目の当たりにしてきた。すなわち流血の大変革というものが、いかに恐ろしいものであるかを……。（XII•96、補足引用者）

ゲルツェンにおける「専制革命」論とは、過渡期という時代認識において、「余計もの」としてのペテルブルクの専制政治とインテリゲンツィアに課せられた自己変革あるいは自己否定の試みであった。自己変革なければ、自己否定に至るべしという彼のオプションは、ロシア国内にいる旧友たちに不安を与えた。ラヴローフなどゲルツェンより若い世代においても、同様である(45)。だがゲルツェンの視野は、国際情勢にも広がっていた。1856年のパリ条約以後、急速にロシアがフランスに接近すると、彼は『フランスかイギリスか』という小冊子の中で、ナポレオン三世のフランスはロシアの友ではないと論じ、フランス国民に対して「国内のペレストロイカという偉大な活動」（XIII・250）を呼びかけたのであった。　【続く】

注

(1) В. И. Ленин, Полн. Собр. Соч., 5 изд., т. 21.

(2) 金子幸彦・長縄光男訳『過去と思索』全3巻、筑摩書房、1998-99年。

(3) 拙稿「ゲルツェンにおける歴史感覚と歴史意識」（愛知県立大学外国語学部『紀要』

地域研究・国際学編第 22 号、2000 年) pp. 157-174.

(4) Isaiah Berlin, Herzen and Bakunin on Liberty, Russian Thinkers, ed., by H. Hardy and A. Kelly, London, 1979, pp. 86-87, 邦訳 福田歓一・河合秀和編『思想と思想家』(バーリン選集 1)、岩波書店、1983 年、211-212 ページ参照。

(5) さしあたり、以下を参照。Nicholas V. Risanovsky, The Image of Peter the Great in Russian History and Thought. N. Y., 1985. 拙稿「ゲルツェンのピョートル一世観—「専制革命」論を中心に—」(『ロシア史研究』№48, 1989 年, 55-69 頁)

(6) Dmitry Shlapentokh, The Revolution in Russian Intellectual Life 1865-1905, London, 1996, Michel Mervaud, Herzen et la Révolution française, Revue de Études slaves, Paris, LXI/1-2, 1989, pp. 169-187. Б. С. Итенберг, Россия и Великая Французская Революция, М., 1988.

(7) Shlapentokh, op. cit., pp. 8-9.

(8) Ibid, p. 12.

(9) エカテリーナ二世時代のフランス革命に関する文献については、以下の論文を参照。佐々木照央「エカテリーナII世の時代の検閲について」(佐藤茂行編『ヨーロッパ社会運動史全体像把握のための書誌情報の計量化』、1983 年、57-83 頁)、岩田行雄「フランス革命とロシア」(『専修大学人文科学年報』、2000 年 3 月、25-68 頁)

(10) Н. М. Карамзин, Письма русского путешественника, М., 1984. 同書のパリの部分については、次の邦訳がある。福住 誠訳『ロシア人の見た十八世紀パリ』(1995 年彩流社刊)

(11) カラムジン、前掲邦訳、32-35 頁。訳者はレベクとしているが、ここではルヴェクと表記した。

(12) 女帝の怒りについては、次の史料を参照。Русский архив. №10, 1878, стр. 88.
またこの間の事情については拙稿「エカテリーナ二世時代の歴史論争—ボルチンによるルクレールとシチェルバートフ批判—」(『西洋史論叢』第 21 号、2000 年 1 月、37-48 頁) を参照。

(13) カラムジン、前掲邦訳、58-61 頁。

(14) Г. И. Моисеева, М. М. Щербатов и Н. М. Карамзин, 《XVIII век》, сборник 14, Л., 1983, стр. 81.

(15) Ю. М. Лотман, Карамзин, М., 1998, стр. 115.

(16) デモクラシーは日本で民主制と民主主義の二様に訳し分けて使われるが、英独仏などヨーロッパの言語では、こうした区分はない。ただし、現代ロシア語においては、デモクラティヤという言葉とそれをロシア語に直訳したナロードヴラスティエという言葉のほかにデモクラティズムという用語がある。日本語に訳せば文字通り民主主義となるこの用語は、おそらくレーニンの造語であり、デモクラシーにイデオロギー的意味合いを込めて使ったものである。革命以前の辞書にあるのは、デモクラティヤとナロードヴラスティエだけである。ハンナ・アレントによれば、デモクラシーという

言葉がフランスに現れたのは1794年以降のことであった。『革命について』(志水速雄訳、中央公論社、昭和50年) 127頁参照。

(17) 例えばポーランドの革命詩人ミツケーヴィチは1840年12月29日、コレージュ・ド・フランスにおける「スラヴ文学講義」でピョートル一世を「国民公会」に引けをとらない大胆で過激な改革をおこなったとし、「彼自身、彼ひとりが公会全体であり、アイデアを創り上げ、自分でそれらを実行しました。さらに彼はフランスの改革者たちよりも幸いなことに、制度に生命を吹き込むことができ、その制度は今日でも存在し、果実を産み出しています」と述べている。早稲田大学井内敏夫氏による訳文に基づいた(未公刊)。

(18) А. С. Пушкин, Пол собр соу в 10 томах, М, 1958, Г. VIII, стр. 146 補足原文.

(19) Г. Федотов, Певец империи и свободы ; Пушкин в Русской философской критике, М., 1990, стр. 356-375.

(20) А. С. Пушкин, Собрание сочинеия в 10 томах, М., 1976, Т. 7, стр. 210

(21) Там же, стр. 357.

(22) Cynthia H. Whittaker, The Elective Element in the Russian Monarchy of the Eighteenth Century, Papers for Conference of the Japan Society of Russian History, Meiji University, Tokyo, October 9-10, 1999. 拙稿「18世紀ロシアの専制政治をめぐる若干の考察ーシンシア・ウィタカー氏の報告に寄せて」(『ロシア史研究』第66号、2000年4月) pp. 44-60.

(23) フランス語の挿入は、ゲルツェン自身による。以下同断。この「雑感」は、フランス語で書かれた立法の歴史に関するレポート(著者不詳)の注釈として書かれたものであり、括弧内のフランス語表記は、原文からとられたと思われる。(Ⅰ・519)

(24) Cynthia H. Whittaker, The Origins of Modern Russian Education : An intellectual history of Count Sergei Uvarov, 1984, p5 なお同書のロシア語版も出版されている。Цинция Х. Виттекер, Граф Сергей Семенович Уваров и его время, СПб., 1999.

(25) Cynthia H. Whittaker, op. cit., p. 4

(26) К. С. Максимов, Народвластие и монархия в историческом труде И. П. Елагина : Диалог двух культур-Монархия и Народовластие в Культуре Просвещения, М., 1995, стр. 52-56.

(27) Итенберг, Указ. соч., стр. 54.

(28) Итенберг, Указ. соч., стр. 51.

(29) В. Г. Белинский, Собр. Соч., т. 9, стр. 482.

(30) В. Г. Белинский, Собр. Соч., т. 9, стр. 483.

(31) Там же.

(32) 「劇薬」という用語は、遅塚忠躬『フランス革命――歴史における劇薬――』(岩波ジュニア新書、1997年) より借用。

(33) E. H. Carr, The Romantic Exiles, 1933. (Reprinted in Penguine Books, 1968), p.

27.

(34) メシチャンストヴォという語は、ゲルツェンによって二通りに意味で使われている。狭義には、階層とか階級を表し、広義には、階層や階級にこだわらず、精神生活のあり方を示す。語源的に言えば、ポーランド語の mieszczanin からの借用語 мещанин に由来する。mieszczanin は都市を表す miasto に接尾辞-anin が加わり、訛ったもので、単純な意味としては、ドイツ語の Bürger と等しく都市住人のことである。14 世紀にロシア語化されたときも単に都市住人を意味し、горожанин と同義であったが、後に特に下層の都市住人を指す語として使われるようになった。さらに 19 世紀には「個人的利害のみを考える俗物」という軽蔑的なニュアンスがこめられるようになる。См. Н. М. Шанский и др., Краткий Этимологический Словарь Русского Языка, стр. 265.

(35) Иванов-Разумник, История русской общественной мысли : Индивидуализм и мещанство в русской литерарure и жизни XIX в. 3-ье изд., СПб., 1911, т. 1, стр. 377.

(36) Литературное Наследство, т. 67, стр. 553.

(37) З. В. Смиронова, Социальная Философия А. И. Герцена, М., 1973, стр. 148.

(38) クリミア戦争期のゲルツェンについては、拙稿「クリミア戦争期のゲルツェン——「ロシア改革」論とポーランド問題——」、早稲田大学『社研研究シリーズ』21 号、1986 年を参照。

(39) ドルジーニンによれば、匿名ではあれ、自らを「ロシア自由主義者」と呼んだという意味で、これは「ロシア自由主義者の最初の公然たる行動であった」。Н. М. Дружинин, Москва в годы Крымской войны. История Москва, т. 3, М., 1954, стр. 777.

(40) Голоса из России : Сб. в 9 кн., Лондон, 1856-60, фак. изд. в трех выпусках, М., 1974-75, ч. 1, стр. 9-36.

(41) Литературное Наследство, т. 67, стр. 597.

(42) Т. Н. Грановский и его переписка, т. 2, стр. 456. Цит. по В. А. Китаев, От фронды к охранительству, М., 1972, стр. 41.

(43) Китаев, Указ. соч., стр. 86-87.

(44) Голоса из России : ч. 1, стр. 34.

(45) 佐々木照央『ラヴローフのナロードニキ主義歴史哲学』(彩流社、2001 年)、83-86 頁。